

## 幕末明治の写真師列伝 第七十八回 武林盛一 その九

北一条西七丁目にあった武林写真館の支店は、三島常盤の弟子の青木終一が経営していたが、こちらはその後、青木終一の長男、好和が継いで、昭和44年(1969)末には同所に三階建ての写真館ビルを新築した。このため札幌の武林写真館の四代目は青木終一、五代目が青木好和となる。

青木終一は、明治24年(1891)10月11日に山崎渚(大分県人)の四男として札幌郡琴似村字新琴似五番通り123番地で生れた。明治25年(1892)、菱沼家に養子に出され、更に青木哲之助(宮崎県人)の養子となったため、青木終一となる。青木終一は高等小学校を卒業後の明治38年(1905)7月に三島常盤の門下生となり、その後、上京して三島常盤の弟子で東京の京橋区北紺屋町五で開業していた森川愛三写真館で働き、その時代に結婚した。大正3年(1914)5月24日に好和は東京市世田谷で生れている。大正6年(1917)8月、札幌に戻る。大正7年(1918)に北海道拓殖50年記念大博覧会が開催されて、そのために北一条西七丁目東角に武林写真館の支店が開設されると、金30円の月給でこの支店を任された。

大正9年(1920)3月8日、青木終一の妻、チズが腹膜炎のため病死する。そのため、青木終一は、同年秋に三島常盤の仲介で、塩谷村の佐々木タケヨと再婚する。大正10年(1921)12月、火災にあい写真館が全焼。青木終一はその後を井上勝利、水上五郎、古川辰四郎などの門下生に托し上京する。上京後は森川愛三の元にしばらく居たが、土地問題などが解決すると札幌に戻り、札幌市北八条東二丁目に写真館を再興し、細々と生活を営む。その後、南一条西四丁目角に移転。青木終一と後妻、タケヨの間には、聡和と美津子が生れる。

昭和39年(1964)11月6日、青木終一死去。青木終一の長男、好和が五代目として武林写真館を継ぐが、南一条西四丁目角札幌市の道路拡張計画にかり、1メートル半余り削り取られることになったため、南一条西十三丁目に今までの古い建物をビル形式の鉄筋建築に新築して移転する。二男、和夫は仙台市へ、三男、昭は江別市に、美津子は東京に住み、聡和は後妻のタケヨと共に暮らす。

明治34年(1901)に三島常盤が設けた、北一条西三丁目にあった武林写真館支店は、弟子の松井千代三が2、3年、責任者として勤めていたが、松井千代

三は退職して十勝芽室へ行き独立開業した。その後、この支店は、大正10年頃までは営業を続けていたが、武林磐雄が金策のためこの土地を売ってしまったため無くなった。

その後の武林磐雄については、武林夢想庵『武林夢想庵盲目日記』(記録文化社、1972年)に詳細が書かれているので、本稿では述べないが、磐雄は養父の没後、一時的ではあるが武林盛一の名を襲名したという。昭和37年(1962)3月27日、武林夢想庵(磐雄)は享年82歳で亡くなっている。最後の地は練馬区下石神井2-1560、石神井神社の真裏にある二階建ての古家であった。武林夢想庵(磐雄)は、雑司ヶ谷霊園にある武林家の墓で、養父、武林盛一と一緒に眠っている。武林盛一の代表的な弟子としては、三島常盤、対馬寅太、木津信吉、宮内多吉、津島力などがいる。二代目武林写真館、三島常盤の代表的な弟子としては、二宮専司、大条秋畝、森川愛三、松井千代三、大館功造、福島一策、奥村幸七(藻山)、青木直司(露村)、大塚福明、松平三郎、高橋清次郎、青木終一(三代目武林写真館)、白川富吉、伊藤繁三、小西保、土田喜一郎などがいる。

(森重和雄)

### 【参考文献】

- 林頼三著編『北海紀行 卷之二』付録
- 札幌区役所編『札幌区史』
- 島岡宗次朗編『月乃鏡』
- 武林写真館同窓会武量会編『武林写真館五十年誌』
- 浅沼治編『浅沼藤吉傳』
- 越崎宗一『北海道写真文化史』
- 武林夢想庵『むそうあん物語』全43巻
- 岩佐博敏編『北海道写真百年史』
- 武林夢想庵『武林夢想庵盲目日記』
- 武林写真館同窓会武量会編『武林写真館 百年の歩み』
- ニッコールクラブ編『北海道開拓写真史 記録の原点』
- 『写真新報』1908年5月号第116号
- 函館市史編纂室編『地域史研究 はこだて』1993年第17号
- 『北海タイムス』1934年11月5日、6日新聞記事
- その他